

2024年11月10日 説教「らくだが針の穴を通る」

ルカの福音書 18章 18～30節

先週はルカの福音書 18章の末尾から学びましたが、今朝は同じ 18章から、少し節を遡って学んでいきましょう。

1. イエスのところに来た役人 (18～20節)

- ①ある役人の質問 (18)「またある役人が、イエスに質問して言った。『尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。』」

マタイの福音書にみると、この役人は青年だったとあります。彼が『尊い先生』とよびかけたのです。尊敬を払った呼びかけではありますが、彼にはイエスを神とする心はありませんでした。そして、『何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けられるでしょうか』と質問しています。彼は行なうことによって、永遠のいのちを得ようとしていたのです。

- ②尊い方は (19)「イエスは彼に言われた。『なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにほだれもありません。』」

それに対してイエスは、『尊い』という呼びかけをした役人の心の中にある事実を指摘されました。つまり、役人は神に向かって呼ぶ言い方でそのように言っていますが、それは表面だけなのです。そこを、キリストは注意しているのです。つまり、尊い方は神だけなのに、あなたは心にもないようなことを言っていますね、と仰せになりました。

- ③十戒の教え (20)「戒めはあなたもよく知っているはずですが。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え』」

そして、十戒にある人間関係における戒めを彼に示されました。第七戒『姦淫してはならない』、第六戒『殺してはならない』、第八戒『盗んではならない』、第九戒『偽証してはならない』、第五戒『父と母を敬え』。これらの戒めはユダヤ人であれば、誰でも知っているものでした。永遠のいのちを得たいなら、これらの戒めを守りなさいと言われました。

2. 役人への衝撃の一言 (21～23節)

- ①小さい時から (21)「すると彼は言った。『そのようなことはみな、小さい時から守っております。』」

その若い役人は親から厳格に律法教育を受けたのでしょう。少しいらついたように、『そのような初歩的なことでしたら、小さい頃から教えられ、守ってもます』。そういうことではなくて、永遠の命を得るための確実な行ないはないのですか。それを教えていただきたいのです。』と言わんばかりです。

- ②まだ一つだけ欠けたものが (22)「イエスはこれを聞いて、その人に言われた。『あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。』」

そこでイエスが返された言葉は、若者にとっては衝撃弾でした。彼の存在の本質に迫るものでした。イエスは、彼に持ち物を売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そして天に宝を積みなさい。その上で、『わたしに従ってきなさい』と命ぜられたのです。

- ③金持ちだったから (23)「すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。」

この役人は、イエスの一撃を受けると、顔を曇らせ、悲しみながらその場から去りました。この人は、多くの財産をもっていたので、それを捨てるわけにはいかないと考えたのです。

3. 捨てて従う価値 (24～30 節)

- ①裕福な者が神の国に (24～25)「イエスは彼を見てこう言われた。『裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。』」

ここにイエス・キリストによる、忘れられないお言葉が示されます。『金持ちが神の国に入ることは何と難しいことでしょう。裕福な人が神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通るほうがやさしい』。この「らくだが針の穴を」という部分については、エルサレムの城壁にある「針の穴」という門という解釈もありますが、素直にらくだが本物の針の数ミリの穴を通るくらい難しいと採ったほうが印象的ですし、イエスさまは極めて難しいことの表現をこのように表現されたのだと考えられます。

- ②だれが救われるのか (26～27)「これを聞いた人々は言った。『それでは、だれが救われることができるのでしょうか。』イエスは言われた。『人にはできないが、神にはできるのです。』」

これを聞いた人々(他の福音書では「弟子たち」)は、驚きながら『それでは誰が救われることができるのでしょうか』と尋ねました。すると主イエスは『人にはできません。神にはどんなこともできるのです。』と答えられました。

- ③神の国のために (28～30)「すると、ペテロは言った。ご覧ください。私たちは自分の家を捨てて従ってまいりました。イエスは彼らに言われた。『まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。』」

そのときに、ペテロは何を思ったのか、『私たちは家を捨ててあなたに従ってまいりました。』と弟子たちを代表して述べました。これに対し、主イエスは、『神の国のために、家、妻、両親、子どもを捨てて来た者は、幾倍も受け、後の世では永遠のいのちを受ける』と仰ってくださいました。

《結論》今朝の聖書箇所から、三つのことを学びましょう。

第一に、この聖書箇所でも語られていないことについて伝えましょう。それは、ここでは、金持ちが否定されているのではないということです。裕福であることが悪いのではなく、そのことのゆえに生じやすい問題が指摘されているのです。つまり、お金を豊かに所有しているということは、それに心が依存しやすいということです。時にはお金が神のようになってしまうということです。マンモニズム(拝金主義)です。しかし、この次の章に出て来るザアカイも金持ちでしたが、イエスに出会って救われました。お金から解放されて自由になりました。この点で覚えておきたいことは、お金持ちでなくとも、お金に心が依存していれば、同じ穴のむじな、なのです。

第二にもう一つ、ここでは語られていないことを考えます。ここに出て来る弟子ペテロたちは、裕福な若者に比べて、全く問題がない優等生と主イエスがみなしているのかといえば、そうではないということです。確かに、ペテロが述べているように、彼らは自分の家業である漁業を捨てて、キリストに従ってきました。それについて、キリストは一定の評価をしていることは確かです。しかしそれでも、キリストはペテロたちのうちにある不純な点を見逃してはいませんでした。それは「私たちは捨てて従ってきました」と、誇らしげ語っているところにみることができま

第三に、それではここで、主は何を語らんとしているのでしょうか。それは、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」と主が述べられたことにヒントがあります。その時に、そこにいた人々(弟子達を含む)が、「それでは、だれが救われることができましょう」と言ったことも、もっともです。しかし、その時に主は言われました。「人にはできないことが、神にはできるのです」と。ここで語られていることは、救いは神の恵みに与えられ、神の御力によってのみなされるということです。この若人は、何をしたら(行ったら)、永遠のいのちをえられますかと問いましたが、行ないで人は救われることはありません。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるではありません。だれも誇ることはないためです。」(エペソ2:8-9)。ですから、ペテロたちも捨てて従ったから救われたのではなく、恵みによって、捨てさせられ、従わせられたのです。また、ザアカイも金持ちでしたが、主イエスの愛と恵みによって、捨てさせられ、従わせられ、救われたのです。

讚美歌 243 の 1 節「ああ主のひとみ、まなざしよ。きよきまえを、去りゆきし、富める若人、みつめつつ、なげくはたれぞ、主ならずや」とありますが、主はこの富める若者を、その愛のまなざしを注ぎながら、立ち返りを待っておられました。しかし、彼は離れていきました。主は悲しそうに見つめられていたことでしょう。私達も、持つか持たないかに注目するのではなく、主の恵みに浴するかどうか心に向きたいのです。そこにこそ、「らくだが針の穴を通る」ような出来事が備えられるのです。恵みによって、しがみつき、握りしめているものを、捨てさせられ、主に寄りすがっていきましょう。